【339】

氏　名（本籍）	直　江　俊　雄（愛　知　県） （なお　え　とし　お）
学位の種類	博　　士（芸　術　学）
学位記番号	博　乙　第　1627　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	20世紀前半の英国における美術教育改革の研究 —マリオン・リチャードソンの理論と実践—

主　査	筑波大学助教授	博士（芸術学）	岡　崎　昭　夫
副　査	筑波大学教授	文学博士	相　馬　　隆
副　査	筑波大学教授		角　井　　博
副　査	聖徳大学教授		仲　瀬　津　久

論文の内容の要旨

本論文は，マリオン・リチャードソン（Marion Richardson, 1892－1946）の美術教育論と教育実践の解明を通して，20世紀前半の英国における初等・中等教育段階の美術教育改革について考察したものである。ここでの美術教育改革とは，初等・中等教育における描国あるいは美術に関する教科教育において，主として20世紀初頭から中葉にかけて展開された，学習者中心の教育への変革運動を意味している。その運動においては，方法的には，一律に設定された手本の模写からの離脱と，学習者自身の感覚や思考に基づく個別的な表現への転換が共通の課題とされ，思想的には子どもおよび一般の人々すべてが，専門家あるいは一部指導層の設定した基準の受容者にとどまることなく，自らが表現の主体者として固有の価値を生み出しうる存在である，とする理想が共有されていた。リチャードソンは，英国バーミンガムの美術学校に学び，ダドリー女子ハイスクールにおいて美術教師として実践する中で子どもたちの内面的イメージや美術批評の学習を重視した独自の教育方法を発展させ，展覧会や講演などによってその考えと成果を広めた後に，ロンドン市美術視学官として現職教師への指導を通して20世紀前半の英国における初等・中等教育段階の美術教育改革の推進した中心人物であり，日本においても彼女の死後に刊行させた著書（Art and the Child）が異なる訳者によって1958年と1980年の2度にわたり邦訳刊行されている。

本論文の第1章「思想形成と初期改革」・第2章「美術教育改革の展開」は，社会的・文化的背景とリチャードソンの生涯を軸にしてこの改革運動を歴史的に解明している。リチャードソンによる改革は，英国社会における教育の大衆化への漸進的な歩みと，主として大陸からの文化的影響のもとでの英国美術の急速な転換に伴う自国民の美的判断力への批判的風潮を背景として，美術と美術教育双方の領域からの相互影響のもとに発展した，英国独自の文脈をもつ運動であった。また，特別な能力のある子どもや低年齢の子どものみではなく，地方の公立中等学校における普通教育の中から現実的な改革を示した点や，視学官としても，それまでの視察と採点中心から協力と啓発中心の役割への転換を主導した点などに，リチャードソンによる教育改革の運動としての特性を見出している。

第3章「前期講演原稿」・第4章「後期講演原稿」は，主としてリチャードソンの未刊行の講演原稿の解読を通して彼女の美術教育論の本質を究明している。1918年講演は，美術の普遍性と美的経験の絶対性への確信を基盤に，他の一般的な能力への貢献によって正当化するのではなく，美術そのものの価値のために学ぶという本質主

義の立場を明確にした点で，リチャードソンの一貫した美術教育観の原点を示すものである。1919年講演では，文化形成の基盤としての国民の美的判断力の育成という，個人の発達を超えた美術教育の社会的役割の強調や，個人の表現を積極的に指導する上での「ビジョン」概念を用いた解決策の提示に注目することができる。1920年の講演では，従来の記憶画による教育方法との相違を強調するとともに，マインド・ピクチャーに初めて言及し，子ども自身の内発的な基準の確立を基盤とした学習は，外部からの基準による場合よりも遥かに深い到達点を示すという，彼女の教育方法における学習者中心の原理について展開している。

1925年のロンドン市の現職教師対象の講習会における連続講演は，リチャードソンが，拡大する革命運動の指導者として活動した時期の最も中核となる内容を示すものである。特に，ダドリー女子ハイスクールにおける教育実践の中で独自の教育方法が形成された過程を，自然描写の学習からの晩脱から内面的価値の確立を経て再び自然へと回帰する段階によって説明した点は重要である。また，自らの教育の独自性を19世紀からの美術教育史の転換の上に位置づけるとともに，内面的イメージに基づいた教育方法の有効性を強調している。1930年の「直感と教授」と題された講演は，それまでのリチャードソンの思想と方法を包括し，均衡をもって統一的パターンの中に位置づけようとするものであり，美術と子どもの美術の共通の評価基準とを，形態上の統一感と内的視覚の機能において探究し，それらを結びつける具体的な手段として，マインド・ピクチャー，パターン，ワード・ピクチャー等の代表的な方法を位置づけている。

第5章「内面的イメージに基づく教育方法」・第6章「教育方法の全体的構造とその適用」は，主としてリチャードソンのマインド・ピクチャーと呼ばれる独特の教育方法を検討して，その方法を現代の日本の小学校において実際に適用してみた成果を検証している。マインド・ピクチャーは，内面的イメージ，作品の名称，教育方法の諸側面から定義されるが，本論文では，リチャードソンによるその認識の変遷を明らかにするとともに，実際の学習過程における機能について考察し，さらに，アーカイブ所蔵の465点のマインド・ピクチャー作品をデータベース化して体系的に整理分類し，形態上の特徴に見る年代的な発展の過程とリチャードソンの美術教育論との関連を考察している。さらに，リチャードソン教育方法の全体像については，「描画」「パターン」「美術批評」の3種の範疇から固有の内容と相互の関係，その発展過程等を明らかにし，それら3種を実際に適用する際の問題点を抽出した上で，現代の教室における実践に適用し，その結果を考察している。

本論文は，以上の第1章から第6章に至る考察を通して，リチャードソンによる改革が今日の英国における美術教育における主要な思想的基盤を形成したといえるほど広範に浸透し，その後の英国の美術教育の様々な動向は，この変革のもたらした限界の超克，あるいは対抗軸の形成として現れてきたことを指摘している。子どもの美術に着目した改革運動は，英国に限らず欧米や日本においても20世紀の美術教育が企てた実験の序章としての意義を持ち，近代美術における個人の表現への視点と教育における個人の価値の尊重との接点に生じた，近代における思想的運動の一つして捉えられている。著者によれば，その運動は現在から見れば既に相対化されつつあるとしても，すべての学習者が表現者として美術を学習できるという改革の主張が現在においてもなお美術教育の理論と実践に有効であるかどうかが，単なる相対主義へと軸足を移す前に，検討されなければならないことである。その意味で，今世紀における美術教育の最も重要な成果の一つであった個人の表現に基盤をおいた教育のもつ価値について，この根源に戻って新たな探究を行い，批判と再評価の具体的根拠を提示することは，今日の美術教育研究の重要な課題と見なされている。著者は，リチャードソンの主導した美術教育の改革の本来の特質は，描写技術の訓練から個人の表現へという転換において，それを実現する基盤を美術に基づいた学習者の内面的規範の確立に置いたところにあり，「学習者中心の美術教育」と「美術の内容に関する学習・教師のリーダーシップ」とは排除し合うものではなく，リチャードソンの場合はむしろ緊密に結びつくことによって有効に機能しえたと結論づけている。

審査の結果の要旨

リチャードソンは子どもの美術に着目した英国の美術教育改革の転換期を主導した重要人物にもかかわらず，彼女の美術教育に関するほぼ唯一の資料が病没直前に綴った回想録の断片的な記述に限定されていた要因から，その教育の全体像と独自性については必ずしも正当な評価を英国においてにされてきたとは言えない。著者は，リチャードソンに関するこれまでの研究の評価と問題点とを詳細に検討した上で，バーミンガム中央イングランド大学マリオン・リチャードソン・アーカイブ所蔵の第一次資料（主として，生前の原稿，書簡，指導計画書，子どもの作品等，約１万点）を独自に調査した。その結果をもとに，リチャードソンの美術教育の理論と実践について解明し，英国の美術教育史おけるリチャードソン研究に新たな掲示するとともに，ある種の普遍的な近代的現象ともとらえられる今世紀前半の美術教育改革の意味を問い直し，リチャードソンの美術教育の理論と実践を現代の日本の小学校において適用した事例を通して「学習者中心の美術教育」の可能性と課題を掲示したところに，本論文の多大の意義が認められる。

また，1910年のポスト印象派展によって英国美術に大きな衝撃を与え，当時の英国美術とそれを生み出す教育制度を批判した美術批評家ロジャー・フライや，フライの美術論の限界を批判して後の英国美術の独自の展開を導いたハーバード・リードとの相互影響のもとに，リチャードソンの美術教育論の発展がもたらされたことは，本論文の重要な発見の一つに属する。さらに，彼女が生前に執筆した一連の講演原稿は，現職教師を対象として自身の美術教育感を説いて改革運動への参加を促したものであり，彼女の思想的発展の軌跡を示したものとして極めて重要であるが，これらに対する包括的な検討は，これまで英国においても充分に行われてきたとは言えなかった。本論文では，リチャードソンの講演原稿のうち主要な７編について全文翻訳を行い，その他の資料と関連させながら解読を行った結果，これまでの英国におけるリチャードソン研究では看過されてきた「マインド・ピクチャー」と呼ばれる独特の教育方法が彼女の教育方法の全体構造の中で不可欠の機能を果たしていたことを明らかにした。この研究結果は英国においても未だ検討されていないので，英国の美術教育学会誌にこの研究結果を英語論文で公表することを著者に期待したい。

本論文はその目的，内容構成，研究成果の独自性，文章表現など全般的において高度な質的水準に達しており，著者が発見した原資料に関する解釈は破綻がなく精緻を極めており，引用文献による卓抜した再構成の叙述には的確な解釈に基づく思索に裏づけられて目をみはるものがあると，学内の副査から評価された。また，学外の副査からも，特に，(1) マインド・ピクチャーの解明がリチャードソンの美術教育の特質を明らかにできるという観点にたち，具体的根拠に基づいた解釈を提示したこと，(2) マインド・ピクチャーの意義と役割を明にしたこと，(3) リチャードソンの美術教育の実践上の問題点と現在の英国及び我が国における適用の可能性の考察にまで及んでいること，(4) リチャードソンの講演原稿を初めて完全に和訳して，我が国における今後のリチャードソン研究に寄与したこと，(5) リチャードソン・アーカイブが所蔵する児童作品の文字・画像情報を網羅したデータ・ベースを作成したこと，(6) 本論文を通して美術教育の研究に国際的な貢献を果たしたこと，などが高く評価された。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。